

大学新入生における携帯 OPAC の利用意向

村上 晴美(大阪市立大学大学院創造都市研究科)

harumi@media.osaka-cu.ac.jp

大学新入生 255 人の携帯 OPAC の利用意向を分析した。利用意向と関連のある主な項目は「パケット定額サービスの加入」と「システムを使いやすいと感じた割合」であった。利用意向は、初回調査では女性、追跡調査では文系が高かった。理系男性は利用意向が低かった。携帯 OPAC を使わない理由は、「お金がかかる」「不必要」「遅い」「使いにくい」「他理由」「機能不足」の順番であった。携帯 OPAC への機能要望は、「休館日案内」「予約」「貸出延長」「新着図書」「お知らせ」「他要望」の順番であった。

1. はじめに

携帯電話の普及に伴い、大学図書館において携帯 OPAC の導入が進みつつある。しかし、携帯 OPAC は本当に使われているのだろうか。図書館にとって不可欠なサービスなのであろうか。利用者属性によって利用の特徴やニーズに差異はあるのだろうか。国内外ともに、PC 版 OPAC の利用についての研究は数多く存在するが、携帯 OPAC の利用に関する研究は文献[1]などを除けば数少ない。

本研究は、大学図書館における携帯 OPAC の利用意向を明らかにすることを目的とする。

今回は、大学新入生における携帯 OPAC の利用意向を分析する。(a) 利用意向、(b) 使わない理由、(c) 機能要望の 3 つに分けて分析する。利用者属性としては、文理と性別の観点に焦点をあてる。

2. 調査方法

大阪市立大学は文系 4 学部（商、経済、法、文）、理系 4 学部（理、工、医、生活科）の合計 8 学部から構成される、我が国最大規模の公立大学である。全学共通教育科目「情報基礎」（コンピュータリテラシー教育であり、実態として初年時教育としての役割を果たしている）において授業毎に以下の 2 回の調査を行った。

統計分析は χ^2 検定による。原則として有意水準を 5%としているが、文理と性別に関しては、有意傾向（10%）を検討の参考にしている。以下では、5%有意（*）、1%有意（**）、0.1%有意（***）の記号を用いる。

(I) 初回調査

携帯 OPAC の実験とともに、質問紙調査を行った。調査項目は、(I) 利用者について (I-1) 基本属性（性別、年齢、学年など）、(I-2) 携帯電話関連（キャリア、加入サービス、携帯検索経験、携帯検索エンジン経験など）、(I-3) コンピュータ環境（自宅、大学など）、(I-4) 通学方法、(I-5) 図書館関連（図書館利用、OPAC 利用など）、(II) 実験について（アクセス方法、システムの使い

やすさなど）(III) 今後について（利用意向、使わない理由、機能要望など）であった。

質問紙を配布後、まず、(I)に記入させた。次に、PC 版 OPAC と携帯 OPAC の操作説明を行い、利用者の携帯電話を用いて説明書どおりのキーワード検索操作実験を行った。最後に、(II)と (III)に記入させた。

2007 年 6 月 8-29 日に実施した。

(2) 追跡調査

携帯 OPAC の利用実績と利用意向について質問紙調査を行った。

初回調査実施後の 3 週間から 5 週間後の、2007 年 7 月 9-24 日に実施した。

3. 被調査者の概要

初回調査では 294 人から質問紙を回収したが、1 年生 255 人に限定して分析する。

表 1: 被調査者の概要

	男性		女性		合計	
文系	64人	11.7%	68人	18.1%	132人	14.3%
理系	52人	11.6%	71人	28.3%	123人	17.6%
合計	116人	11.7%	139人	22.2%	255人	15.7%

注) %の分母は在籍人数

表 1 に文理、性別の集計表を示す。%で示す数字は在籍人数との比率である。本学の 1 年生の在籍人数は 1,621 人であり、255 人は 15.7%にあたる。2 部の社会人学生¹⁾1 人を除いて全員が携帯電話を所有していた。本調査より以前に、図書館で本を探したことがあるのは 160 人 (62.7%)、PC 版 OPAC の認知率は 66.3% (169 人)、既利用率は 54.5% (139 人) であった。携帯 OPAC の認知率は 4.7% (12 人)、既利用率は 0.4% (1 人) であった。

¹⁾ 文系 4 学部には 2 部があり、2 部の被調査者中に社会人学生が 4 人いた。

4. 利用意向

4.1 初回調査

(1) 概要

「このシステムを、今後使うと思いますか」という質問に「思う」と答えたのが、115人(45.1%)、「思わない」と答えたのが128人(50.2%)、無回答が12人(4.7%)であった。この項目を「利用意向」と呼ぶ。

(2) 利用意向と関連する項目

「利用意向」と有意差を示した項目は、「パケット定額サービスの加入(以下、パケット)***」「携帯電話での検索機能利用頻度(携帯検索経験)***」「携帯電話での検索エンジン利用頻度(携帯検索エンジン経験)***」「システムを使いやすいと感じた度合(使いやすさ)***」「Amazon情報の表示の可否²(Amazon)***」「機能要望：休館日案内(休館日)*」「機能要望：予約(予約)*」「機能要望：新着図書(新着図書)」「文理と性別の4群(4群)*」であった。

「利用意向」は「文理」とは関連がなく、「性別」とは有意傾向を示した。なお、「文理」と「性別」の間に関連はなかった。

(3) 文理での制約

「利用意向」と関連する項目について、「文理」で制約をかけた。5%水準で共通するのは「パケット」「使いやすさ」であった。

文系では、「パケット***」「OPAC 端末を利用した経験があるか(OPAC 端末利用経験)*」「使いやすさ***」「Amazon***」「予約*」と「利用意向」が関連した。「携帯検索経験」「携帯検索エンジン経験」が「利用意向」と有意傾向を示した。

理系では、「性別*」「パケット**」「携帯検索経験*」「携帯検索エンジン経験**」「使いやすさ*」と「利用意向」が関連した。「休館日」が「利用意向」と有意傾向を示した。

(4) 性別での制約

「性別」で制約をかけた。5%水準で共通するのは「パケット」「使いやすさ」であった。

男性では、「パケット**」「携帯検索経験**」「携帯検索エンジン経験**」「使いやすさ**」と「利用意向」が関連した。「文理」「Amazon」「機能要望：お知らせ(お知らせ)」と「利用意向」が有意傾向を示した。

女性では、「学部*」「パケット**」「使いやすさ*」「Amazon*」「新着図書*」と「利用意向」

が関連した。「携帯検索経験」「携帯検索エンジン経験」「予約」が「利用意向」と有意傾向を示した。

以下では「利用意向」と、「パケット」「使いやすさ」「携帯検索経験」「携帯検索エンジン経験」について、「4群(文系男性、文系女性、理系男性、理系女性)」毎に分析する。

(5) 利用意向と文理 性別

「利用意向」との関連(図1)については、「文理」とは関連がなく、「性別」とは有意傾向であった。女性の利用意向がやや高かった。

また、「4群」と関連があり*、残差分析の結果、理系男性の利用意向が低いことがわかる。さらに、理系男性以外(文系男性、文系女性、理系女性)と理系男性の2群に分けて、「利用意向」との関連を調べたところ有意差があった**。

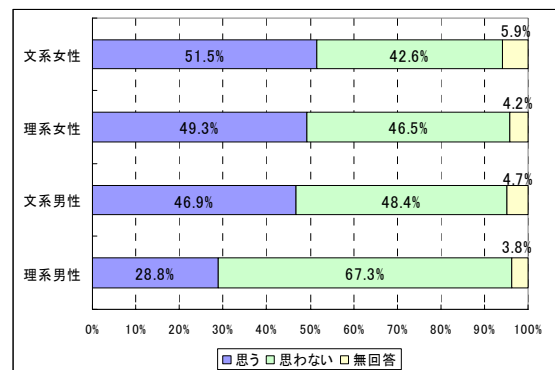


図1: 利用意向と文理、性別

(6) パケットと文理 性別

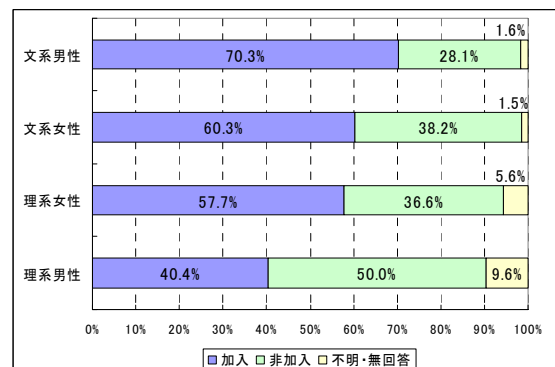


図2: パケットと文理、性別

「パケット」との関連(図2)については、「文理」とは関連があり**、「性別」とは関連がなかった。文系の方がパケット定額サービスによく加入していた。

「4群」間に有意差があり**、残差分析の結果、文系男性の加入の高さ、理系男性の加入の

2) 本システムは Amazon の内容表示機能を持つ。

低さがわかった。

(7) 使いやすさと文理 性別

「使いやすさ」はシステムを使いやすいと感じた割合の5段階評定値である(5:非常に使いやすい; 1:非常に使いにくい)。「使いやすさ」との関連については、「文理」とは関連がなかったが、「性別」とは有意傾向があった(図3)。

「4群」間に有意差があり*、残差分析の結果、理系男性の使いにくさ(1,2の割合)がわかる。

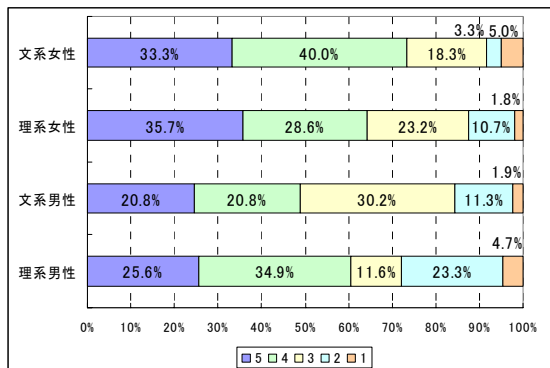


図3: 使いやすさと文理, 性別

(8) 携帯検索経験と文理 性別

「文理」、「性別」ともに「携帯検索経験」と関連はなかった。「4群」間に有意差もなかった。文系男性、文系女性、理系女性、理系男性の順番に利用頻度が高かった。

(9) 携帯検索エンジン経験と文理 性別

「携帯検索エンジン経験」との関連については、「文理」とは関連があり*、「性別」では関連がなかった。文系の方が検索エンジンをやよく利用していた。

「4群」間に有意差もあり*、残差分析の結果、文系男性の利用頻度の高さと理系男性の利用頻度の低さがわかった。

4.2 追跡調査

(1) 概要

1年生 206人から質問紙を回収した。追跡調査における「利用意向」を「追跡利用意向」と呼ぶ。「追跡利用意向」は「思う」88人(42.7%)、「思わない」115人(55.8%)、「無回答」1人(1.5%)であった。

なお、期間内の携帯 OPAC の利用実績は、文系女性(15.7%)、文系男性(8.7%)、理系女性(7.7%)、理系男性(4.5%)の順番であった(「携帯利用実績」と呼ぶ)。「携帯利用実績」と関連がある項目は「機能要望:貸出延長(貸出延長***)」のみであった。

(2) 追跡利用意向と関連する項目

「文理*」「パケット**」「携帯検索経験*」「使いやすさ*」「Amazon*」「不使用理由:不必要(不必要)***」「新着図書***」「利用意向***」が「追跡利用意向」と関連した。

(3) 文理と性別での分析

「追跡利用意向」については、「文理」と関連があり*、「性別」とは関連がなかった。文系の利用意向が高かった。文系男性、文系女性、理系女性、理系男性の順番になった(図4)。

「4群」において有意傾向が見られ、残差分析の結果、理系男性の利用意向が低かった。

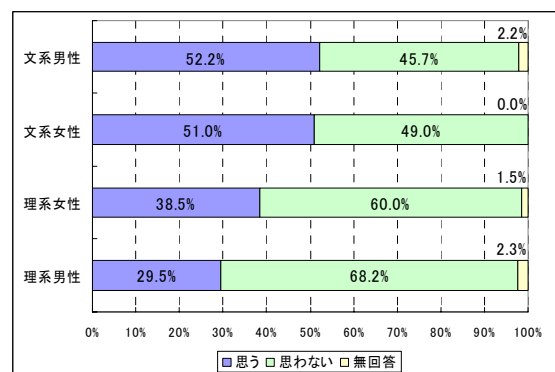
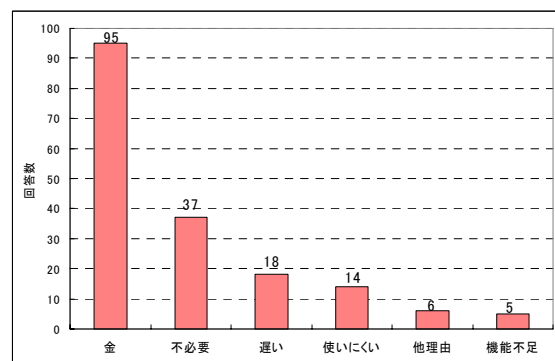


図4: 追跡利用意向と文理, 性別

5. 使わない理由

初回調査において「使わない理由」はまず「不使用理由:お金がかかる(金)」,次に「不必要」であり,以下,「不使用理由:遅い(遅い)」「不使用理由:使いにくい(使いにくい)」「不使用理由:他理由(他理由)」「不使用理由:機能不足(機能不足)」の順番であった(図5)。



注) 複数回答有

図5: 使わない理由

「4群」毎の「使わない理由」を図6に示す。「金」については、「性別」で有意傾向があった。すなわち、女性は「金」の比率が高かった。「遅い」については、「文理」で有意傾向があ

り、「性別」で有意差*があった。すなわち、男性と理系は「遅い」の比率が高かった。「不必要」については、「性別」で有意差*があった。すなわち、男性は「不必要」の比率が高かった。

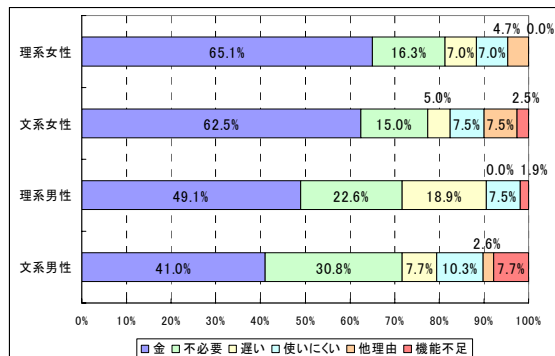
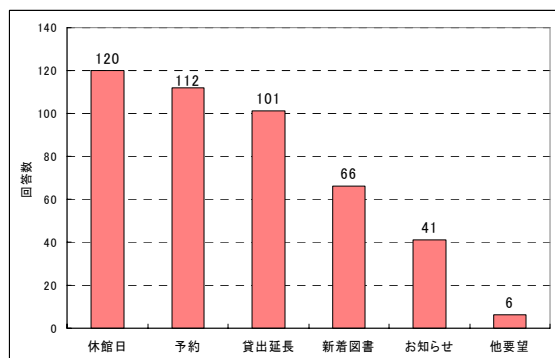


図 6: 使わない理由と文理, 性別

6. 機能要望

初回調査において、「機能要望」は、まず、「休館日」「予約」「貸出延長」、次に「新着図書」、その後「お知らせ」「機能要望：他要望（他要望）」の順番となっている（図 7）。



注) 複数回答有
図 7: 機能要望

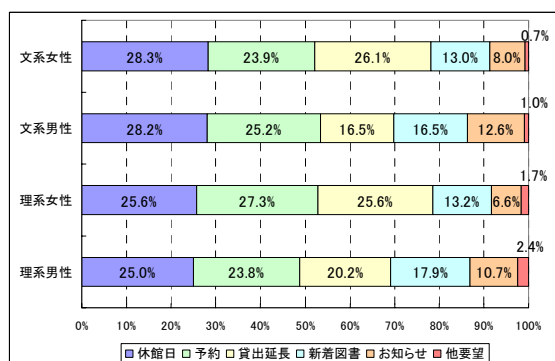


図 8: 機能要望と文理, 性別

「4 群」毎の「機能要望」を図 8 に示す。各理由について、「貸出延長」以外は「文理」や「性別」による有意差はなかった。「貸出延長」

は「性別」において有意差**があり、女性は「貸出延長」の比率が高かった。

7. 考察

実験後の調査では女性の利用意向がやや高かったが、実験を伴わない追跡調査では文系の利用意向が高くなり、性差がなくなった。文系の利用意向が高いことは、本学における図書館利用調査[2]や他大学の事例[たとえば 3]と合致する。初回調査での女性の意向の高さや、初回から一貫した理系男性の意向の低さについては、図書館利用だけでなく、携帯電話利用やコンピュータ利用と関連があると思われる。

携帯 OPAC を使わないと思う理由は、お金がかかることと必要性を感じないことが 2 大原因である。後者は、図書館利用の必要性と他の方法（散策や PC 版 OPAC）と比較しての必要性に大別される。ただし、自由記述結果より、現状の携帯 OPAC が使われない理由は、存在が認知されていないこと、遅いこと、機能不足などの複合原因が認められる。

8. おわりに

大阪市立大学新入生における携帯 OPAC の利用意向について、文理と性別に焦点をあてて、(a) 利用意向、(b) 携帯 OPAC を使わない理由、(c) 携帯 OPAC の機能要望を分析した。

謝辞

本研究は文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C) 19500205「モバイル 2.0 時代の大学図書館携帯 OPAC の利用に関する研究」の補助を受けた。

参考文献

- [1] 根岸正光. 図書館とモバイル・アクセス：i モード対応システムにおける図書館員・利用者の経験. 大学図書館研究, 2003, 67, p.50-57.
- [2] 吉井良邦他. 大阪市立大学学術情報総合センターにおける図書市民利用制度の実施事例. 大学図書館研究, 2006, p.32-40.
- [3] 奥山智紀他. プロフィール別に見る留学生の図書館・情報サービス利用：東京大学における実態調査の分析から. 名古屋大学附属図書館研究年報, 2003, p.31-42.